

留学生支援ボランティアの役割と現状

岡 益 巳

1. はじめに

アルセン (1999) によると、「外国人であれば、どこにいても必ず何らかの問題に直面するもの (p.102)」であり、在日外国人留学生とて例外ではない。「儒教」と「漢字」という2種類の共通する文化的な背景を持ち、日本社会への適応が相対的に容易であろうと推測される中国人留学生でさえ、日本で生活するためには周囲の人々からのさまざまな支援を必要としていることが、例えば、周の一連の研究から明らかである¹⁾。ましてや、東南アジア、南アジア、中近東、アフリカ、欧州、北米、中南米など、文化的背景が全く異なる地域からやって来る留学生にとって、日本社会への適応が大きな困難を伴うであろうことは想像に難くない。

横田 (1997) は、留学生の異文化適応のプロセスについて、ファーンハムとボックナーの指摘を引用し、「年齢、言語能力、自立心、心身の健康状態、社会的支援の量と質、現地での役割、ホスト文化の性格、政治や宗教などのさまざまな個人的・社会的な条件が関与しており、けっして一様ではない (p.70)」と述べ、留学生の日本社会への適応を促すさまざまな条件の中に、「社会的支援の量と質」を挙げている。

社会的支援 (ソーシャル・サポート²⁾) の送り手は、指導教員・留学生担当事務職員等の大学関係者、日本人学生、同国出身の留学生、学外の日本人など留学生の周囲に存在するさまざまな人々である。日本人学生や地域住民が留学生支援ボランティアとして提供するソーシャル・サポートも留学生の異文化適応プロセスに寄与することから、周・深田 (2002) は在日外国人留学生に対するサポートの在り方に関する提言の中で、「留学生支援を目的とする日本人学生ボランティア・サークルの育成 (p.176)」に言及している。

在日外国人留学生に対するソーシャル・サポートの種類を考えると、日本語、日本文化、専門分野などの勉学面における支援のみならず、金銭や物質的な面における生活支援も重要である。これらに加えて、生活面におけるサービス提供型の支援、すなわち、入寮、履修登録、外国人登録、国民健康保険加入、銀行口座開設等の学内外の諸手続や買い物、アパート探し、さらには交流イベントの開催、話し相手・相談相手、情報提供といった形での支援も必要とされている。

留学生支援ボランティアに期待される支援は、勉学面における日本語や日本文化の学習に対する補完的な支援および生活面におけるサービス提供型の支援である。日本語教育を含めた正規の教育は大学が、また、奨学金の支給、授業料免除といった本格的な生活支援は、大学あるいは大学を通じて国、地方公共団体、各種団体、企業等が実施するものであり、ボランティアに期待される支援ではない。ボランティアには、日用品程度の物質的な

支援は可能であるが、それはあくまでも付随的な支援に過ぎない。

なお、留学生支援ボランティアの組織形態としては、学内および学外の2種類の支援団体が考えられるが、本稿では学内の支援団体の役割と現状とを絞って論じることとし、学外の支援団体の活動に関しては別の機会に譲りたい。

2. 岡山大学における留学生支援ボランティア制度

2.1 留学生支援ボランティア制度の創設

岡山大学には1992年4月に留学生センターが設置され、庄司恵雄氏（現・お茶の水女子大学教授）が留学生相談・指導部門に着任した。庄司氏は、1993年秋に留学生支援ボランティアの試験的な組織づくりを試み、翌1994年4月に本格的な制度化を実現した。ボランティア制度の立ち上げの目的は、庄司（1994）によると次のとおりである。

「アメリカ合州国（原文のまま：筆者加注）のような多民族国家では何でもない留学生と自国学生との交流が、異文化接触の歴史の浅いこの国、この地では、両者を媒介するシステムがどうしても必要になる。留学生支援ボランティア制度は、この留学生と日本人学生の媒介を留学生支援の形で具現するべく発足させたものである。これが目的の第1。さらに、外国人（すなわち欧米白人文化）と接したいという日本人学生の素朴な好奇心を、留学生を支援することを通じて彼らの文化に学ぼうとする態度に育て上げることは、知識教育だけでは達成できない機能であるが、その機能を留学生支援ボランティア制度が果たすのである。これがこの制度創設の第2の目的である。（p.104）」

庄司（1994）によれば、1993年度後期には、10名余りのボランティア応募者があり、留学生相談室を訪れる留学生のカンパセーション・パートナーとしたが、（1）ボランティア活動に発展がみられず、（2）留学生の利用者が増加しない、といった問題が発生した。原因は、（1）ボランティア間の交流の欠如、（2）留学生とボランティアの交流の持続性の欠如にあった。このため、1994年度には、ボランティアを留学生相談室の学生スタッフとして登録し、留学生生活支援部門と日本語教育部門に分けて活動の場を提供し、ボランティア活動を「待ち」から「出動」へと切り換えた。この結果、留学生とボランティアの交流が活発になり、多彩な活動を展開できるようになった。すなわち、同年4月の新入留学生歓迎ハイキングを皮切りに、ソフトボール大会、交流パーティーなどの各種の交流イベントが企画実施され、同年10月には留学生の家族のための日本語教室もスタートした³⁾。この日本語教室には、留学生の家族だけではなく、正規の日本語授業の受講資格のない外国人研究員、さらには留学生も参加することもある（庄司（1996a）p.103）。

1996年度に入ると、ボランティアによる日本語研修生を対象とするチュートリアル・サービス活動が始まった。これは、「日本語研修生の日本語学習の補佐を中心に、必要があれば日常生活面における援助にも当たらせる（庄司（1996b）p.151）」ことを目的とした活動である。

2.2 留学生支援ボランティア制度の定着

1999年11月に筆者が留学生相談・指導部門の2代目の担当者として着任した当時、年間を通じて行われるボランティア活動は大きく3分類され、(1) クロスカルチャーイベントの開催、(2) 家族のための日本語教室の運営、(3) チュートリアルサービスの実施であった。各々の活動の開始時期は、前節で示したとおり、(1)が1994年4月、(2)が1994年10月、(3)が1996年4月であり、これらは現時点に至っても留学生支援ボランティア活動の根幹を成す活動である。1996年度以降、全体を統括するチェア・パーソンのもとで、クロスカルチャー、日本語教室、チュートリアルの各セクションのリーダー3人がそれぞれのセクションの活動をリードして来たが、クロスカルチャーに関しては2002年度後期には従来型のリーダーを置かず、イベントの度ごとにリーダーを選出する方法に変わった。2002年度後期の半年間あるいは次年度前期末までの年間を通してクロスカルチャーのリーダーを引き受けるスタッフが見つからなかったためであるが、これ以降、イベントを企画する都度、そのイベントのリーダーを選ぶという方法を探っている。

庄司氏によって創設された留学生支援ボランティア制度は、1990年代末には定着した感があり、ボランティア自身である程度の活動を企画し遂行できるレベルに達していたが、筆者の着任後、幾つかの制度上の改善を試みた。

第1に、2001年4月に、不十分ながら、ボランティアの活動拠点を確保した。従来は24平米の小さな空間が相談指導担当教員の研究室兼留学生相談室兼留学生支援ボランティアの活動拠点であったが、留学生センター資料室の半分の10平米弱をボランティア室として使用することが認められた。これにより、留学生相談室を訪れる留学生のプライバシー保護の問題も解決された(岡(2002) p.107)。

第2に、2001年4月に、日本語サロン、通称「お話し会」の活動を始めた⁴⁾。日本語研修生等の日本語運用能力の向上および日本人学生との交流を目的として、留学生会館で夕方時間帯に週2回の「お話し会」を始めたが(岡(2002) p.114)、試行錯誤の結果、同年10月以降は週1回年間20回前後の開催とし、今日に至っている。

第3に、2001年4月に、留学生支援ボランティアグループの名称を「留学生支援ボランティア・WAWA」に決定した⁵⁾。創設以来、留学生相談室に所属するボランティアグループには固有の名称がなく、単に「留学生(支援)ボランティア」と称していたが、学内で留学生支援ボランティアを自称する別のグループが活動を始め、紛らわしい状況が発生したため、スタッフ間で協議した結果、グループの名称を決定した。「WAWA」は「和(わ)」と「輪(わ)」を表し、「わわ」と発音する(岡(2002) p.114)。

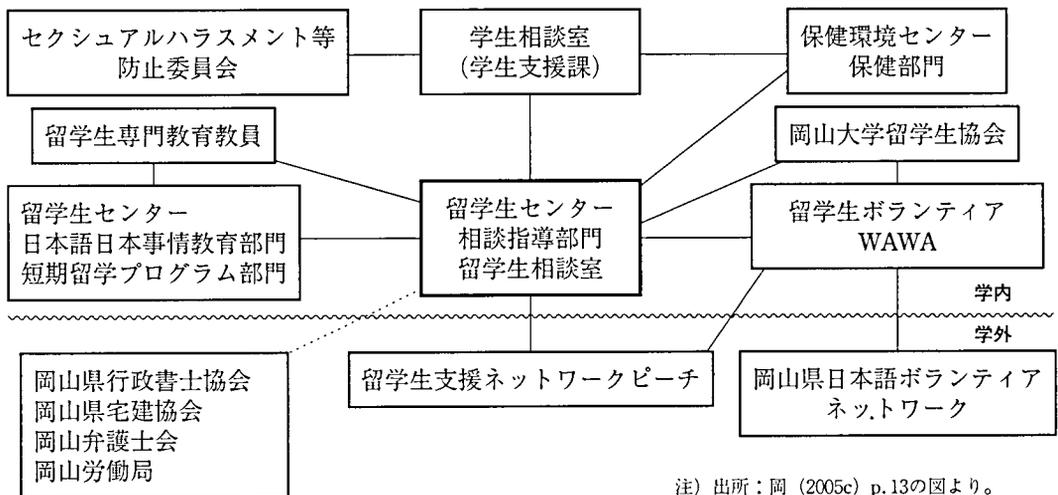
第4に、2002年4月に、留学生支援ボランティア・WAWAの活動が留学生センターの対留学生サービス活動の一環として正式に認知された。すなわち、同年4月4日に開催された留学生センター定例教員会議において、留学生支援ボランティアの趣旨、活動内容、登録方法、活動記録、養成セミナーの開催などについて協議が行われ、その結果、(1)

内規が制定され⁶⁾、(2) 年間3万円の活動予算が承認され、(3) ボランティア登録者に対する登録証の交付が決定された(岡(2003) p.45, p.56)。

2001年から2002年にかけて、ボランティアを自称する不審な人物が頻繁に留学生会館に出入りする事態が発生したことも、WAWAのスタッフに対する登録証の発行を促した要因の一つである。登録証は学生証と同じサイズで、表面は写真入りの日本語表記、裏面は英語表記となっており、特に、留学生の来日時の受入れ支援の際には必ず専用ケースに入れて首から吊り下げるように指導している。

なお、ボランティアスタッフのほとんどは岡山大学の日本人学生であるが、発足時より留学生に加えて、社会人、他大学生、高校生などの参加も認めている点が特徴的である。ちなみに2005年度現在でみると、社会人6人、他大学生2人、岡山大学留学生1人が登録している。社会人6人のうち2人はWAWAのOBであり、卒業後は岡山市内で勤務の傍らボランティア活動をしている。

図1 留学生相談室からみた留学生支援ボランティアの位置づけ



注) 出所: 岡(2005c) p.13の図より。

2.3 留学生相談室からみた留学生支援ボランティアの位置づけ

岡(2005c)で述べたとおり、岡山大学では留学生センターの相談指導部門が留学生相談指導に関して中核的役割を果たすことを求められている。また、近年は留学生の相談指導に加えて、留学生と日本人学生あるいは地域社会との交流の促進を図ることも重要な任務となっている。2004年度の場合、留学生、教職員、日本人学生、学外者などに対する情報提供を含む相談指導延べ件数は2,395件であり(p.11)、筆者は図1に示した学内外の関連組織・団体の協力を得て、業務を遂行している。

これらの組織・団体の中で、特に、留学生支援ボランティア・WAWAは、(1) 新入生の受入れ支援、(2) チュートリアル・サービス、(3) 留学生の家族のための日本語教室、

(4) 日本語サロン、(5) 各種交流イベント、(6) 学外支援団体との連携、(7) 留学生センター主催行事への協力等、年間を通じて盛りだくさんの留学生支援・交流事業を展開しており、今や留学生相談室にとって必要不可欠な存在となっている。

3. 2004年度の留学生支援ボランティア・WAWAの活動

2004年度には、留学生支援活動を企画実施するため、留学生センターのセミナー室1において、水曜日の昼休み(12:00~12:30)に全体ミーティングを合計33回開いた。

3.1 留学生支援ボランティアの登録者の内訳

2004年度当初の登録者数は52人であったが、同年度末までに1人の脱退者と17人の登録者があり、最終的には68人となった。男女別にみると、女性が54人、男性が14人であり、女性が優勢である。所属学部別では、文学部が群を抜いて多い。

表1 2004年度末・留学生支援ボランティア登録者の所属形態別人数の内訳

	1年生	2年生	3年生	4年生	院 生	その他	計
文学部	1	10	3	11	2	1	28
教育学部	2	1	2	0	0	0	5
法学部	0	3	0	1	0	0	4
経済学部	1	2	0	1	0	0	4
理学部	1	0	3	1	1	0	6
医学部	0	1	1	3	0	0	5
歯学部	0	0	1	0	0	0	1
薬学部	1	0	0	0	0	0	1
工学部	1	0	3	1	0	0	5
環境理工学部	0	0	1	0	0	0	1
農学部	0	0	0	1	1	0	2
他大学	0	0	2	0	0	0	2
社会人	—	—	—	—	—	4	4
計	7	17	16	19	4	5	68

注) 「4年生」には医学科6年生2人、「その他」には科目等履修生1人を含む。

「院生」は出身学部ごとに示す。

3.2 チュートリアル・サービス

チューターとチューティーが曜日、時間帯、サービスの内容等について相談の上、授業期間中は原則として毎週1回チュートリアル・サービスを実施した。また、チュートリアル活動を円滑に遂行するために、リーダーを中心に、前期3回、後期2回、年間合計5回のチューターミーティングを開催した。

前期は、留学生センターに所属する日本語研修生7人に対して、チューターを13人配置した。このほかに、チューターをつけてほしいとの要望のあった研究生(トルコ、インド

ネシア) 2人に対しては計3人のチューターを配置した。後期は、留学生センターに所属する日本語研修生8人及び日韓共同理工系学部留学生事業による予備教育生(以下、「日韓予備教育生」と略称する)4人に対して、チューターを19人配置した。このほかに、チューターをつけてほしいとの要望のあった研究生(ヨルダン、バングラデシュ)2人及び日研生(セルビア・モンテネグロ)1人に対して、合計5人のチューターを配置した。

前期の日本語研修生のチューターに対する満足度をみると、5段階評価で、「5:とても満足している」が4人、「4:満足している」が3人であり、平均4.6であった⁷⁾。定期的にチューターと会った者は6人で、残りの1人は自分の都合で定期的に会わなかった。後期の日本語研修生8人のチューターに対する満足度は、「とても満足している」2人、「満足している」5人、「普通」1人であり、平均4.1と前期に比較してやや満足度が低い。チューターと定期的に会わなかった者が3人存在し、しかも3人とも定期的に会わなかった理由を「チューターが忙しいため」としている。日韓予備教育生4人の場合は、定期的に会わなかった者が2人存在するが、チューターに対する満足度は、「とても満足している」3人、「満足している」1人で、平均4.8と高い。チューターと定期的に会わなかった理由は、2人とも「連絡を取り合ってお互いに都合の良い時に会った」である。

チュートリアル・サービスの内容は、日本語の授業の復習、日本語会話の練習相手のほかに、大学生協加入、携帯電話購入、銀行のATMの利用などの手伝いであった。

3.3 留学生の家族のための日本語教室

2004年度には初級クラスを週2回、延べ87回、中級クラスを週1回、延べ33回開講した。受講者延べ数は初級クラス445人、中級クラス86人、合計531人であった。受講者を身分形態別にみると、留学生の家族が328人(61.8%)と最も多く、次いで留学生114人(21.5%)、研究員74人(13.9%)、その他15人(2.8%)の順である。日本語教室の円滑な運営を図るため、水曜日の午後に年間10回、留学生センターのセミナー室1で日本語教室ミーティングを開催した。

高松(1997)は、留学生自身よりも精神的な不安定に陥る危険性が高いのは、「留学生の家族、特に配偶者(大部分は妻)である(p.76)」と述べ、かつ白土(1993)を引用して、その理由を「留学生夫人は、①日本語能力の問題がある、②孤独な状況におかれやすい、特に夫が理系の学生の場合には実験等で帰りが遅い、③母国での仕事を辞めて来日している場合は、日本で何をするか目標が持てず、むなしさを感じている、④どこにもでかけられない、親しい話し相手がいらない、などの問題を持っている(pp.76-77)」と述べている。横田・白土(2004)も、家族同伴で来日する留学生の問題点として、「配偶者の日本語能力が十分でない(p.179)」、「配偶者のホームシック(p.179)」などを挙げている。

したがって、乳幼児同伴での参加も可とするWAWAの日本語教室は、単に日本語を勉強する場ではなく、受講者同士およびボランティアとの交流の場でもあり、孤立しがちな留学生の配偶者にとって精神的なオアシスの役割を果たしていると言えよう。

日本語教室の運営に当たっているスタッフは、JJI (Joyful Japanese Instructors) というサブグループを形成し、「岡山大学 JJI」という名称で、岡山市内および倉敷市内の5団体で構成する岡山県日本語ボランティア・ネットワークに加盟している。同ネットワークの事務局は岡山大学留学生相談室に置かれ、加盟5団体が持ち回りで隔月に勉強会を主催している。9月11日には岡山大学 JJI が勉強会を主催した⁸⁾。同ネットワークの創設者は庄司氏である。

表2 2004年度 日本語教室・月別開講回数と受講者数

	開講回数		受講者延べ数		
	初級	中級	初級	中級	合計
4月	4	0	20	0	20
5月	6	3	55	10	65
6月	11	5	81	20	101
7月	11	3	72	11	83
8月	7	4	30	9	39
9月	—	—	—	—	—
10月	9	4	27	8	35
11月	12	3	42	6	48
12月	11	4	61	10	71
1月	7	3	26	5	31
2月	7	4	27	7	34
3月	2	0	4	0	4
合計	87	33	445	86	531

開講場所：一般教育棟C棟1階
留学生センター
セミナー室1

開講日
初級：水曜日 15:00~16:00
土曜日 10:30~11:30
中級：水曜日 14:00~15:00

受講料：無料

注) 受講者の要望により、初級クラスを追加開講した月もある。

3.4 日本語サロン（お話し会）

複数の日本語研修生から学習した日本語の表現を実際に使用する機会が少ないとの不満の声があり、2001年度に日本人と日本語で交流する場を提供することを目的として「お話し会」の活動を始めた。留学生会館の談話室で木曜日の18時から1時間半程度の活動を行っており、2004年度は前期8回、後期9回、合計17回実施した。毎回平均留学生6.2人、ボランティア6.6人の参加があった。留学生の参加者は、日本語研修生および交換留学生であった。実施内容は、テーマを定めたフリートーキング、テーマを定めぬ雑談、各種ゲーム、日本人家庭訪問時のあいさつの仕方、箸の持ち方、折り紙、書道、年賀状の書き方、豆まきなどであった。

3.5 来日留学生の受入れ支援

到着日時の判明している国費留学生が支援の対象である。筆者とともに留学生会館のロビーで待機し、手荷物や別送便の居室への搬入、布団の購入と居室への搬入⁹⁾、食器や食料品の買い出し支援を行うが、必要に応じて大学の食堂や指導教員の研究室への付き添いも行う。2004年度前期の場合、4月2日から8日にかけて11人が到着し、延べ18人の WAWA

表3 2004年度・WAWAの活動カレンダー

4月2～8日	新規入学者の受け入れ支援。 支援対象者は到着日時の判明している国費留学生11人 ①留学生会館で待機し、荷物の搬入、食料及び日用品の買い出し支援 ②外国人登録手続きのため、市役所への引率補助（7日） ③日本語研修生のキャンパス・ツアー引率（8日）
4月8日	日本人新入生勧誘ピラ配り
4月17日	ウェルカム・パーティー（津島キャンパス）
5月11日	留学生支援ネットワーク・ピーチ第23回連絡会議参加（OIC）
5月10日 ～6月10日	ボランティア養成講座（留学生センターセミナー室1ほか） 合計12回
6月19日	岡山県日本語ボランティア・ネットワーク研修会参加（倉敷市文化交流会館）
6月22日	留学生支援ネットワーク・ピーチ第24回連絡会議参加（OIC）
6月25日	ボトラック・パーティー（留学生会館）
7月3日	ホームステイ付き添い（JR児島駅）
7月7日	七夕パーティー（留学生会館）
7月27日	留学生支援ネットワーク・ピーチ第25回連絡会議参加（OIC）
7月30日	見学旅行引率補助（姫路・赤穂方面）、岡山大学主催
8月3日	日本語研修生の修了発表参観（A棟LL教室）留学生センター主催
8月3日	フェアウェル・パーティー（留学生会館）
8月7日	料理交流会参加（OIC）、留学生支援ネットワーク・ピーチ主催
9月11日	岡山県日本語ボランティア・ネットワーク研修会参加（北公民館） 留学生ボランティア・WAWA内JJI主催
10月1～7日	新規入学者の受け入れ支援 支援対象者は到着日時の判明している国費留学生23人 ①留学生会館で待機し、荷物の搬入、食料及び日用品の買い出し支援 ②外国人登録手続きのため、市役所への引率補助（6、7、8日） ③日本語研修生のキャンパス・ツアー引率（7日）
10月13日	ウェルカム・パーティー（留学生会館）
10月26日	日韓共同理工系学部予備教育学生と里親との顔合わせ交流会に参加（OIC） 留学生支援ネットワーク・ピーチ主催 留学生支援ネットワーク・ピーチ第26回連絡会議参加（OIC）
11月19日 ～22日	大学祭（留学生と共にエスニック料理の店を出す）
11月22日	能鑑賞会（後楽園にて駐輪場係及び会場案内）、留学生センター主催
12月8日	スピーチコンテスト（50周年記念館）受付補助、タイムキーパー 留学生センター主催
12月22日	イアエンド・パーティー（留学生会館）
1月18・19日	スマトラ島沖地震救援募金活動（津島キャンパス） 岡山大学インドネシア留学生会との共催
2月22日	日本語研修生の修了発表参観（A棟LL教室）留学生センター主催
2月22日	フェアウェル・パーティー（留学生会館）
2月28日	岡山県日本語ボランティア・ネットワーク研修会参加（西川アイプラザ） 西川日本語教室主催
3月1日	日韓共同理工系学部予備教育修了記念パーティーに参加（OIC） 留学生支援ネットワーク・ピーチ主催 留学生支援ネットワーク・ピーチ第27回連絡会議参加（OIC）

注1) 「日本語教室」、「チュートリアル・サービス」、「日本語サロン」の活動及びWAWA内の各種ミーティングを除く。

注2) OIC=岡山国際交流センター

のスタッフが支援に当たった。また、7日午前には、外国人登録手続きのため、来日者の市役所への引率補助を行い¹⁰⁾、翌8日午後には、日本語研修生対象のキャンパス・ツアーを実施した。後期には、10月1日から7日にかけて23人が到着し、延べ28人のWAWAのスタッフが支援に当たった。また、7日、8日、9日には市役所への引率補助、7日には日本語研修生および日韓予備教育生のキャンパス・ツアーの引率を行った。留学生会館(北棟3階建て、南棟4階建て)はエレベーターがないため、到着時の荷物の居室への搬入は人手が必要である。後期には、別送便を含めて7個の手荷物のある者もいた。また、日本語の分からない留学生で、同国人の出迎えのない者にとって、その日の食事に必要な物を買そろえたり、布団を購入したりすることは困難であり、留学生支援ボランティアの手助けが必要不可欠である。

3.6 クロスカルチャー・イベント(異文化交流行事)

岡山大学には、毎年4月と10月に各々50人から100人ほどの留学生が入学してくる。他方、3月と9月にはほぼ同数の留学生が岡山大学を離れていく。しかし、研究室単位の歓送迎会はともかくとして、例年12月に開催される学長主催の留学生懇親会を除けば、入学してくるあるいは卒業していく留学生のために大学主催の歓迎会や送別会が執り行われることはない。

表3で示したように、2004年度には留学生支援ボランティア・WAWAは、4月と10月にウェルカム・パーティー、8月と2月にフェアウェル・パーティー、6月にポトラック・パーティー、7月に七夕パーティー、12月にイアエンド・パーティーと合計7回のパーティーを開催し、留学生相互および留学生と日本人との交流を深める機会を提供した。パーティーは、概ね土曜日の夜、留学生会館の談話室で開催された。このほかに、11月の大学祭では、留学生と協力してエスニック料理の店「ラ・バンバ」を出した。

3.7 ボランティア養成講座

留学生支援ボランティアのスタッフとして必要な知識を学ぶことを目的として、2004年5月10日から6月10日にかけての昼休み(12:00~12:30)に、学内の教員の協力を得て、合計12回のボランティア養成講座を実施した。講師の依頼交渉から日程の調整に至るまでボランティア学生が自主的に行った。

WAWAのスタッフは、各自が興味のあるテーマを自由に選んで受講することができ、12回全てを受講する必要はない。ただし、新しくボランティアとして登録した者は「留学生支援ボランティアのための基礎知識」を受講するように勧めた。毎回の受講者数は10人から15人ほどであった。

3.8 学外の団体「留学生支援ネットワーク・ピーチ」との連携

2004年度に開催された留学生支援ネットワーク・ピーチの第23回から第27回までの連絡会議に、WAWAから毎回2人または3人が出席し、同ネットワークの活動計画の立案に参画した。同ネットワーク主催の行事へのWAWAスタッフの参加状況は次のとおりであ

表4 2004年度ボランティア養成講座

①	5月10日 (月)	テーマ：留学生支援ボランティアのための基礎知識 (1)	講師：岡益巳 (留学生センター、WAWA顧問)
②	5月11日 (火)	テーマ：留学生支援ボランティアのための基礎知識 (2)	講師：岡益巳 (留学生センター、WAWA顧問)
③	5月13日 (木)	テーマ：世界の中の日本語について (1)	講師：辻星児先生 (文学部)
④	5月17日 (月)	テーマ：世界の中の日本語について (2)	講師：辻星児先生 (文学部)
⑤	5月20日 (木)	テーマ：外国人の子供に対する日本語教育 (1)	講師：光元聰江先生 (教育学部)
⑥	5月21日 (金)	テーマ：外国人の子供に対する日本語教育 (2)	講師：光元聰江先生 (教育学部)
⑦	5月24日 (月)	テーマ：初級日本語の教え方 (1)	講師：坂野英里先生 (留学生センター)
⑧	5月31日 (月)	テーマ：初級日本語の教え方 (2)	講師：坂野英里先生 (留学生センター)
⑨	6月3日 (木)	テーマ：誤解から学ぶ異文化	講師：岡益巳 (留学生センター、WAWA顧問)
⑩	6月7日 (月)	テーマ：日本語の文法 (1) 「～んです」について	講師：酒井峰男先生 (留学生センター)
⑪	6月8日 (火)	テーマ：日本語の文法 (2) 動詞について	講師：酒井峰男先生 (留学生センター)
⑫	6月10日 (木)	テーマ：ホスピタリティーについて	講師：亀高鉄雄先生 (留学生センター)

注1) 出所：岡 (2005a) p.100の表10

注2) 会場は留学生センターセミナー室1 (ただし、⑤⑥は教育学部本館4階406号室)

る。8月7日の「料理交流会」には7人、10月26日の日韓予備教育生と里親との顔合わせ交流パーティーには9人、3月1日の日韓予備教育生の予備教育修了記念パーティーには6人がWAWAから参加した。また、第7回ホームステイ (前期) の折には、日本語の分からない参加留学生のために、ホストファミリーとの待ち合わせ駅の改札口まで付き添いを行った。

3.9 岡山大学留学生センターの行事への協力

日本語研修生のキャンパス・ツアーに関してはすでに述べたが、それ以外にも、日本語研修生の日本語能力確認のための面接に際して、留学生会館から面接会場の教室までの引率 (4月・10月)、見学旅行の引率補助 (7月、姫路方面)、能鑑賞会の駐輪場係と会場案内 (11月、後楽園)、スピーチコンテストの受付補助とタイムキーパー (12月、五十周年記念館) といった形の協力を行った。また、日本語研修生の修了発表 (8月・2月) に毎

回10人ほどの WAWA のスタッフが観客として参加し、発表会を盛り上げた。

3.10 スマトラ沖地震救援募金活動

岡山大学インドネシア留学生会からの協力依頼を受けて、1月18日、19日の両日の昼休みに、同会のメンバーと WAWA のスタッフがピーチ・ユニオンとマスカット・ユニオン前で募金活動を行い、約7万円を集めた。さらに、岡大生協の協力を得て、レジカウンターに3個の募金箱を10日間置かせてもらい、約2万円を集めた。募金合計額91,595円は、2月10日に津島郵便局から日本赤十字社宛に送金した（岡（2005b）p.7）。

4. 結び

当面の最大の課題は、慢性的な人手不足の解消に尽きる。登録スタッフ数を現在の60人前後から100人程度にまで増やす必要がある。1994年10月末現在の登録者数は59人であったが（庄司（1994）p.104）、10年後の現在に至っても登録者数に大きな変化はない。ちなみに2000年度以降、ボランティア登録者数は、卒業生が抜けた直後の4月は40人台から50人台、年度末の3月は概ね50人台から60人台で推移している。しかし、常時ボランティア活動に参加するスタッフは20人前後に過ぎない。日本語教室の運営に関心のある者は10人に満たず、チュートリアル・サービスに興味を抱く者はせいぜい20人ほどである。その上に、他のクラブとのかけもち、就職活動、アルバイト、授業などの忙しいスケジュールの合間を縫ってボランティア活動を行っている者が多いため、現在の2倍程度の登録者が必要である。

こうした悩みは留学生支援ボランティア制度の創設当時から存在しており、庄司（1996）は日本語教室運営上の問題点として、スタッフを養成しても、「学年が上がるにつれて学業やアルバイトに時間を割かれ参加率が下がるため、スタッフが単純に増強されていくわけではない。新メンバーの定着と旧メンバーの活動中止がイタチごっこを演じるわけである。・・・中略・・・メンバーの縮小再生産の中で、継続的に活動しているきわめて少数のメンバーと未経験な新人とで運営せざるを得ない状況に追い込まれる。（p.106）」という現実を指摘している。庄司氏の在任中は初級クラス、中級クラスともに週2回開講していたが、目下のところスタッフ不足が原因で中級クラスは週1回しか開講していない。

スタッフ不足の影響は日本語教室以外の活動にも影響を及ぼしている。例えば、来日留学生の受入れ支援の場合、前期は授業開始日以前に到着するため問題はないが、後期は10月1日から授業が始まっているため、留学生の到着時間帯に WAWA のスタッフが一人も待機していないという事態が発生する。2005年度後期に、筆者は11回の受入れ支援を行ったが、そのうち2回は受入れ時間帯が授業と重なり、WAWA のスタッフは参加できなかった。

後期はチューターの人数の多いため¹¹⁾、チューターの選定が難しい。前期にチューターを経験したスタッフが後期も引き続いてチュートリアル・サービスの提供を希望すると

は限らない。このため、後期はチューター未経験者が経験者とペアを組んでチュートリアル活動を行い、活動のノウハウを習得することができないケースもある。また、高学年次生で多忙なスタッフにも依頼することにもなるため、結果として、定期的なチュートリアル活動が実施できず、チューティーが不満を抱く事態も生じる。

スタッフ数の増強以外に、今後の課題として、全学的な認知を得るための広報活動、ボランティア養成講座の充実、十分なスペースの独立した活動拠点の確保、十分な活動予算の確保、岡山大学留学生協会との協力関係の構築などが挙げられる。

本稿では、専ら留学生に対する支援という観点から岡山大学における留学生支援ボランティアの役割と現状に関して述べてきたが、留学生との出会いの中でボランティア自身が大きな収穫を得ている事実は、岡（2004c）へ寄稿してくれた8人のボランティアスタッフのメッセージからも明らかである。課題は残るにせよ、概ね、当該留学生支援ボランティア制度を立ち上げた庄司氏の意図と期待に沿う活動を展開していると言えよう。

注

- 1) 周の一連の研究については、例えば、周・深田（2002）pp.178-179に列挙されている。
- 2) 我が国において、ソーシャル・サポートに関する研究成果が発表されるようになったのは1980年代後半のことであるが（岡・深田・周（1995）p.29）、在日外国人留学生のソーシャル・サポートに関する顕著な研究成果としては、留学生のソーシャル・ネットワークという視点から留学生に対するソーシャル・サポートを論じた田中（2000）、あるいは在日中国系留学生を対象を絞り込み、周（1992）を出発点とする周の一連の研究が挙げられよう。
- 3) 1994年度のボランティア活動内容の詳細については、庄司（1994）p.105の表-1を参照されたい。なお、10月の日本語教室スタートに先立って、6月から9月にかけて日本語教育ボランティア養成コースが開かれた（庄司（1994）p.106の表-2）。
- 4) 2001年4月からの開催に先立ち、同年1月から2月にかけて4回に渡って試験的に実施した（岡（2002）p.115）。
- 5) 正式名称は「留学生支援ボランティア・WAWA」であるが、「留学生ボランティア・WAWA」という呼称が常用されている。
- 6) 「内規」については、本稿末尾に掲載した「資料」を参照されたい。
- 7) 「チューターに関するアンケート」を毎期、日本事情の最後の授業で実施している。
- 8) 会場は北公民館、講師は杉本和之・岡山大学留学生センター教授で、演題は「“は”、“が”について」であった。
- 9) 布団は管理人室で業者の委託販売を行っている。
- 10) 市役所への引率は、原則として事務職員が担当しており、引率する留学生の数が多い場合に限ってWAWAから引率補助要員を出している。

11) 前期の対象者は大使館推薦国費研究留学生のみであるが、後期はこれに加えて大学推薦国費研究留学生、教員研修留学生、日韓予備教育生が来日する。

参考文献

アルセン, G 著、服部まこと・三宅政子 (監訳) (1999) 『留学生アドバイザーという仕事ー国際教育交流のプロフェッショナルとしてー』東海大学出版会

白土悟 (1993) 「留学生家族の受け入れ体制について (1)」『九州大学留学生センター紀要』5, pp.197-211.

庄司恵雄 (1994) 「留学生センターにおける留学生指導部門のあり方」『岡山大学留学生センター紀要』2, pp.97-112.

庄司恵雄 (1996a) 「留学生の家族のための日本語教室の現状と担当者ボランティアの養成」『岡山大学留学生センター紀要』4, pp.103-120.

庄司恵雄 (1996b) 「日本語研修生のための特設チュートリアル制度の機能及び今後の進め方」『岡山大学留学生センター紀要』4, pp.151-163.

周玉慧 (1992) 「在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートの送り手の分析」『広島大学教育学部紀要、第1部 (心理学)』41, pp.61-70.

周玉慧・深田博己 (2002) 「在日留学系留学生に対するソーシャル・サポートに関する研究」『社会心理学研究』17, 3, pp.150-184.

高松里 (1997) 「留学生支援システムとしてのボランティア活動ーサポートネットワーク<そら>の組織化を通してー」『留学生教育』1, pp.69-83.

田中共子 (2000) 『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ出版

岡益巳 (2002) 「留学生相談室・年次レポート (2000年10月~2001年9月)」『岡山大学留学生センター紀要』9, pp.107-122.

岡益巳 (2003) 「留学生相談室・年次レポート (2001年10月~2002年9月)」『岡山大学留学生センター紀要』10, pp.45-60.

岡益巳 (2004a) 「留学生をめぐる支援活動」『第33回中国・四国大学保健管理研究集会報告書』愛媛大学保健管理センター、pp.30-34.

岡益巳 (2004b) 「留学生相談室・年次レポート (2002年10月~2003年9月)」『岡山大学留学生センター紀要』11, pp.79-96.

岡益巳 (編著) (2004c) 『Q&A ボランティア・ハンドブッカーー留学生ボランティアをはじめのあなたにー』岡山大学留学生センター留学生相談室

岡益巳 (2005a) 「留学生相談室・年次レポート (2003年10月~2004年9月)」『岡山大学留学生センター紀要』12, pp.91-104.

岡益巳 (2005b) 「留学生相談室 (平成16年度後期の活動)」『岡山大学留学生センターだ

より』16, p.7.

岡益巳(2005c)「岡山大学における留学生相談室の役割と現況」『留学交流』17, 10, pp.10-13.

岡益巳・深田博己・周玉慧(1995)「中国人私費留学生のソーシャル・サポート」『岡山大学経済学会雑誌』27, 3, pp.29-59.

横田雅弘(1997)「留学生の適応と教育」江淵一公(編)『異文化間教育研究入門』玉川大学出版部

横田雅弘・白土悟(2004)『留学生アドバイザー学習・生活・心理をいかに支援するかー』ナカニシヤ出版

【資料】

岡山大学留学生センター 留学生相談室所属留学生支援ボランティア

(趣旨)

1. 岡山大学に在籍する学生及び市民で構成されるボランティアの協力を得て、留学生に対する支援を充実させるとともに、ボランティア活動を通じ日本人と留学生との国際交流を促進するため「岡山大学留学生センター留学生相談室所属留学生支援ボランティア」事業を実施する。

(活動内容)

2. 1.に掲げる留学生支援ボランティアは、岡山大学留学生センター主催または共催の国際交流事業等に参加協力する機会が提供されるほか、同センターから国際交流事業等に関する情報を得て、自主的にボランティア活動を行う。

(ボランティア活動への登録者)

3. 本学学生及び市民で、以下により登録した者を留学生支援ボランティアとする。
 - (1) ボランティア活動への登録は、岡山大学留学生センター留学生相談室において行う。
 - (2) ボランティア活動への登録は随時行い、その有効期限は次の通りとする。
 - 1) 本学学生：本学に学籍を有する期間とする。
 - 2) 市民：登録時の年度末までとし、以後申し出により更新する。
 - (3) 所属、身分、住所等に変更があれば届け出る。
 - (4) ボランティア活動への登録者には「岡山大学留学生センター留学生相談室所属留学生支援ボランティア登録カード」を交付する。

(ボランティア活動の記録)

4. 実施したボランティア活動をボランティア室の「活動記録ノート」に記録して、活動の証明とする。

(ボランティア養成セミナー)

5. 本センター留学生相談室は、「ボランティア養成セミナー」等を開いて、ボランティアを育成する

(事業の実施)

6. 本事業は岡山大学留学生センター定例教員会議の承認に基づき、同センター留学生相談指導部門が行うものとし、事務局を留学生相談室内に置く。

7. 登録者が次のいずれかに該当する場合は、登録を取り消す。

(1) 辞退の申し出があった場合

(2) ボランティアとして不適格と認められる事態が発生した場合

*2002年4月4日開催の留学生センター定例教員会議にて承認